

令和6年度 第1回宮城県産業教育審議会 会議概要

日 時 令和6年11月8日（金）午後2時30分から午後4時30分まで
場 所 宮城県庁行政庁舎4階 庁議室
出席委員 半沢章委員、高橋慎委員、加藤雄一委員、川島滋和委員、佐藤千洋委員、
山内明美委員、島瀬康史委員、勅使瓦理恵委員 以上8名出席、4名欠席
県出席者 遠藤副教育長
菊田高校教育課長
高橋高校教育課教育改革担当課長
伊藤高校教育課総括課長補佐 他関係職員（事務局）

次 第

1 開 会

2 委嘱状の交付

3 開会挨拶 遠藤副教育長

4 議 事

（1）報告

- ① 令和5年度宮城県産業教育審議会報告
- ② 令和6年度宮城県産業教育審議会専門委員会報告

（2）審議

- ① 提言素案に向けた論点の抽出及び整理
- ② 提言（素案）骨子案について

骨子1 専門高校と地域・産業界等の連携・協働の強化

学科・類型の質の在り方

- 佐藤委員： 越境できる環境が整えば、公立高校にとってメリットが大きい。
- 山内委員： 通信制との差をはっきり戦略的に打ち出すべきではないか。
- 佐藤委員： 実習について、バーチャル空間での実習など通信教育設備を考えていくのが必要ではないか。
- 半沢委員： 観光インバウンドが見込まれるにもかかわらず日本料理の料理人が不足する等、時代のニーズに必ずしもフィットしていない現状がある。学科編成には時間がかかりニーズをつかまえるのは難しいが、根拠をもって進めていくべきではないか。
- 川島委員： 産業界からのニーズと同様、生徒自身が学びたいと思う学科設定もまたニーズと言えるのではないか。
- 佐藤委員： 地域産業界の人材育成に関するニーズは常に変化している。それら業界のニーズをキャッチしていく余裕が現場にはないのではないか。専門高校、産業界、大学、行政が一体となってコンソーシアム等の協働の仕組みを構築して、教育内容、方法を、人材育成等も含めて検討する必要があるが、大学をもっと活用してはどうか。普通科よりも専門学科は探究活動がやりやすい。
単に進学先として大学を認知するのではなく、専門性を共に研究する場として活用してほしい。
- 高橋委員： 教員にもファシリテート力が求められる時代だと思う。
- 山内委員： 海や山などの地域環境を活かした専門高校をバックアップする大学との連携を深めて特色を明確化することで中学生の進路選択を促すことになるのではないか。

骨子2 産業人材育成のための学校・学びの在り方 学校・学級の数的な在り方、学科構成等

- 半沢委員： 教育基本法、職業選択の自由や進路の多様性は大前提として、少子化が見込まれる中では、県の産業施策を加味しつつ、ある程度の学校集約が必要ではないか。
- 半沢委員： 専門高校・学科を高度化・専門化することにより、所属している学科を変更したい生徒の受け皿となる仕組みも論点になる。小中学校でのキャリア教育の積み重ねを充実させとうえで、編入を緩やかにしたり単位認定を融通する等の措置をとったりすることも必要となるのではないか。
- 半沢委員： 少人数での学習体制が必要かどうかについて根拠をもって検討すべき。
- 勅使瓦委員： 複合的かつ多様な学びが必要だと承知しつつ、現場は教員が多忙で疲弊している。そのため柔軟なカリキュラムが難しい現実もある。
- 島瀬委員： 産業界では、設備投資額と雇用者数がかもはやリンクしていない状況で、企業は、人口減少、人手不足といったことに既に手を打っている。
教育の場で、将来的なニーズを高校の教科科目に跳ね返せるか、また、自由な学びに対応できる教員をどう確保していくのか、大変難しい問題ではないか。

骨子3 少子化を踏まえた魅力発信の新たな方策 長期的視点に立った学校ごとの魅力・学びの在り方

- 半沢委員： 子どもたちの夢をかなえる教育、自由度のある学びが必要ではないか。
- 山内委員： 国内外の状況を見ながら、英語だけでなくアジア圏の語学を取り入れ、国内留学や海外留学生の受け入れ等についても想定していい。不透明な時代だからこそ、必要な学びを生徒に与えられる環境づくりが必要ではないか。
- 山内委員： たとえば防災知識の共有という点で、海外の高校と連携をする必要もあるのだろうが、コーディネートできる教員養成が必要ではないか。必要なマンパワーをポイント投入して、疲弊している学校もカバーしなければならない。
- 高橋委員： 育成就労制度も変化し、全業種において外国人人材が含まれる時代になるという認識でいたほうがいい。そこを踏まえた国際感覚や経営感覚が必要になる。
- 加藤委員： 高校生は以前と違って求められるものが多く大変だと感じた。体験が少ないところが課題であり「失敗する」というのも重要な体験であると考えている。
興味ある学科や授業体験をできる余裕をもてるといいのではないか。
- 加藤委員： ホテル・観光業は外国人人材も活用している。彼らは「時間を守る」「約束を守る」等を学びに来ている。日本人も含めて多くの分野での体験を積み重ねるカリキュラム編成を意識できるとよいのではないか。
- 川島委員： 大学入試も体験重視型に変化してきている一方、早い段階で将来を見定めるのは難しく、レイトスペシャライゼーション（専門分野を決めるのを遅くして選択肢を増やす仕組み）もある。
- 山内委員： 大卒などの学歴よりも好きなことを極めていく力が必要な時代。戦略的に専門高校の在り方を練っていく必要があるのではないか。
- 勅使瓦委員： 体験を伴った実験や実習は体験を伴っており、習得の度合いが深いという実感がある。オンラインだけで実技教科の深い学びが保証できるかは疑問である。

5 その他

6 閉 会